

「はいにっぽん」がモットー

— 寺が運営する老人介護施設でも働いておられるのですね。どんなところですか？

大阪市内の郊外にある「お寺の介護はいにっぽんのいえ」という老人ホームです。お年寄りのいろんな要望に「はい」と「にっこり」答え、「ぼん」とすぐに動くのをモットーとしており、14居室で現在13人が入居されています。居住型で様々なデイサービスも力を入れており、医療ケアもあります。私は寺での法務と並行して、介護福祉部長として求めに応じて入所者の部屋を回ってお世話もします。

— 施設での日々の活動ではどんなことがありますか？

例えばある男性は、以前に入居した奥さまをここで看取り、同じ部屋に入られました。居室には多数の本やパソコン、オーディオ機器が並び、生活の根城です。ご夫婦の写真が飾られた小さな仏壇があるので、訪問するとまず読経します。その方は両足の痺れでベッドに横たわっていることが多いので、「お加減どうですか？」と世間話をしながら足の清拭やマッサージをして差し上げます。

## 尋坊帖 *Jinbouchou*

# 福祉の現場で仏教の教、 基づいたケアを目指す。

吉田 敬一 大阪浄土真宗西栄寺僧括

「老病死」の現場で人生のお手伝いをしたい——。そう願い、寺の高齢者介護施設で働く。

取材・文 ● 北村 敏泰 撮影 ● 成田 舞



Keiichi Yoshida

1969年、兵庫県生まれ。

お寺の介護  
はいにこぼんのいえ





すると、気持ちも落ち着かれ、「コロナで外へも行けへんなあ」などと話が弾みます。先日、重度の感染症で危ない状態になりましたが、コロナ禍の影響で病院には入院できず、私は泊まり込んで居室で看病しました。それもヘルパーとしての仕事です。

### 報恩感謝の思いで福祉の場へ

——そもそも、どのような経緯で僧侶として福祉に関わるようになったのですか？

30歳前に縁あって西栄寺に入った後に結婚しましたが、長女姉真が重度の障がいを持って生まれました。養育過程で実に多くの人たちから支援を受けました。元看護師の方はボランティアで通学に付き添ってくれ、おかげで酸素吸入を付けながら一般小学校に通うことができました。本当にありがたいことでした。姉真が7歳で病死した際には涙が止まらず打ちひしがれました。でも、「多くの方に生きることを助けられた。自分はまだまだだ」と痛感し、「報恩感謝の思い」で福祉の場に身を投じました。

まず妻が福祉ボランティアを始め、私もボランティア講座を受講して高齢者施設での傾聴活動に入りました。その後、西栄寺が福祉事業に乗り出すこともあって、更にヘルパー免許も取り、現場で仕事を続けることになりました。

——そして臨床宗教師にもなったのですね。その過程でどんな学びがありましたか？

それはやはり東日本大震災がきっかけです。宮城県に支援に赴き、直後の臨床宗教師養成講座に第一期生として参加しました。研修の始めに被災で壊滅状態になった石巻市内を慰霊行脚している時、全身が震え、ないはずの髪が逆立ち、涙が止まらなくなりました。「姉真が付いて来ている」。何より大事な自らの命で「人に寄り添う」ということを教えてくれた娘を思いました。

傾聴喫茶「カフェ・デ・モンク」での実習では、方言や地元の地名が理解できなければ話が続きません。私は被災された方の想像を絶するような重いお話を全身全霊で受け止め、学びました。また研修仲間の韓国の牧師から聖書『マタイによる福音書』にある、「人前で善行したり、大通りで祈るのではない。部屋のドアを閉め暗い所で一人祈るのだ」との言葉を教えられ、「自分は人に寄り添うことができる」という慢心を打ち砕かれる思いでした。真剣に自分を見直しました。

### 宗教師の特性を活かす

——活動の中でいろんな気付きがあるのですね。実体験から、接した相手から教えられるということですか？

傾聴活動を進めるに当たって、勢い込

んで「聞き屋」と書いた看板を首から下げ法衣で電車の駅前に立ってみましたが、「見ず知らずのお前になぜ話す？」と言わんばかりの視線を浴びてほとんど相手にされず挫折しました。

臨床宗教師になって、「自分は僧侶だ」とやる気満々で入った緩和ケアでの傾聴では、70代の女性患者に「あんたどこの人や？」と問われました。「近所から来ました」と告げると、「ああ近所の兄ちゃんや」とうなずかれました。その安心したお顔と、「兄ちゃん、私の話聴くのもええけど、家帰ったら嫁さんの話も聞いたりや」の言葉に、強張った肩の力がすっと抜けました。自分が宗教師だとか肩書がどうかじゃなく、評価するのは相手の側なのだ、と腑に落ちたのです。

——福祉という仕事の現場には、僧侶から見てどのような苦難があるのでしょうか？

老いの苦、病気の苦、死の苦が必ずあります。いつもしんどい、痛い、思うように体が動かない身体的苦痛、肉体的苦痛。漠然とした不安、家族との関係の苦、孤立や貧困という問題もあります。

うちの施設で仏教精神を基にした介護福祉というのは、何かを信じることで強さがつくということでしょうか。生老病死という難題を前に、老いてこそ涅槃寂静を目指す、介護が必要になっても目指す、そのお手伝いです。六波羅蜜、無財

の七施、慈悲心と自利利他ですね。

——具体的に仏教の精神が日々の運営でどのように生かされているのですか？

宗教者の特性を活かすということですが、ホームの集会室にある仏壇をきれいに掃除、掃除をすることで喜ばれます。坊さんのいるお寺の施設、宗教的空間に守られるという安心感、それは職員にもあります。

霊とかご先祖とか祈りとか、目には見えない一見非科学的にも思える話を熱心に聞くことで、苦しみや悩みが軽減されるのではないかと思います。お医者さんの手や薬のように、坊さんが手を合わせることが安らぎを生みます。法衣を着ていて安心されることもあり、苦しんでい

る人に合掌すると安堵して返される。皆さんの宗教的発露、信じて強くなる何かを見逃さないようにしなければなりません。

### どう生きるかが大事

——やはり、そこには仏教が息づいているのですか。看取りをすることもありませんか？

はい、医師や介護スタッフとともに。亡くなる前は私はご家族とコミュニケーションを取り、息を引き取られる際はその方の手を握ったり、家族に「声をかけてあげて下さい」と言ったりします。亡くなられると合掌でお見送りし、親族の必要があれば枕経を上げます。寺で葬儀を

執り行う場合もあります。

ホームでのケアにも、孤立や貧困が広がる世間での活動にも仏教が生きています。交通事故で首から下が麻痺し、動く片方の目と片手の人差し指だけでコミュニケーションする男性に接した際には、傍にいただけで本当の苦は到底理解できないのだと痛感しました。でも一方で、余命わずかです。一時帰宅した男性が娘さんのピアノを聴き、奥様の手料理を食べて「自分はこの幸せに生きて来たんだ」と悟ったように口に出された言葉には、鳥肌が立つほど感動しました。老病死の苦は避けられない。でも、だからこそどう生きるかが大事です。そういうことを示し、思い起こしていただくお手伝いができたらと思います。



1. 「はいにこぼん」は町中でも閑静なたたずまい
2. 施設内は清潔で明るい
3. 食堂兼ロビーには憲章が掲げられる
4. 入居者は女性が多く、にぎやかだ
5. 吉田さんは入居者のケアをしながら話を聴く
6. 施設隣接の西栄寺の山門。境内には庭園もある